



# 同窓会会報

## 目次

会長挨拶	1
平成27年度東京女子医科大学看護系 入学生・卒業生数、同窓会会員数	2
教員一覧	3
第15回総会報告	4
講演「看護職のキャリア形成」	9
講演「専門看護職としてのキャリアの構築」	10
同窓生の動向	11

同窓生からのメッセージ	14
東京女子医科大学病院の エキスパートナースの歩み その1	15
学園祭を終えて	20
研究助成金・学生ボランティア助成金応募	21
会則	22
おしらせ	24

## 平成27年度 第15回 同窓会会長挨拶

東京女子医科大学看護系同窓会会長 大熊あとよ



東京女子医科大学看護系同窓会会員の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。本年6月には第15回の総会が行われました。遠いところご参加くださいました方々には厚くお礼を申し上げます。

東京女子医科大学は1900年の創立から今年で115年目を迎え、看護学校に於いては、1930年に助産婦看護教育、陣看護婦教育、看護師教育として、高等専門学校、看護短期大学、第二看護専門学校、看護専門学校、そして看護学部、研究科の前期課程、後期課程の教育と発展して今年で85周年を迎えました。これらの東京女子医科大学看護系の卒業生が一つの同窓会としてまとまることができましたのは、当時の看護短期大学学長の橋本葉子先生、藤枝知子先生、看護専門学校の武藤伺子先生や多くの同窓生のご尽力によるものです。

今年も、看護学部88名、看護専門学校88名の方々が卒業され、本院、東医療センター、八千代医療センターの医療現場でご活躍されています。同窓会の会員数は7,403名（住所不明会員3,953名）と全国でも類のない同窓会となっております。本同窓会の目的は「看護専門職として、看護の発展と社会に貢献するとともに、東京女

子医科大学の看護の発展に寄与すること」です。

本院では、平成27年6月1日付で特定機能病院の承認の取り消し処分を受けることとなりました。本大学は115年の歴史をもち、様々な苦難を乗り越えながら発展を遂げてきました。本年に病院長として就任された田辺一成先生は「昨年事故以来、我々は未曾有の危機に立たされている、ピンチを最大のチャンスととらえ病院の改革に取り組む」と力強いお言葉も述べられています。私たちには、真摯にこの現状を受け止め、学校で学んだ建学の精神にのっとり、患者にとって必要な医療、看護を追求していくことが求められています。そして、看護師だけではなく医師、メディカルスタッフとともにチーム医療を粛々と進め、信頼回復に向けて努力をしていかなくてはなりません。

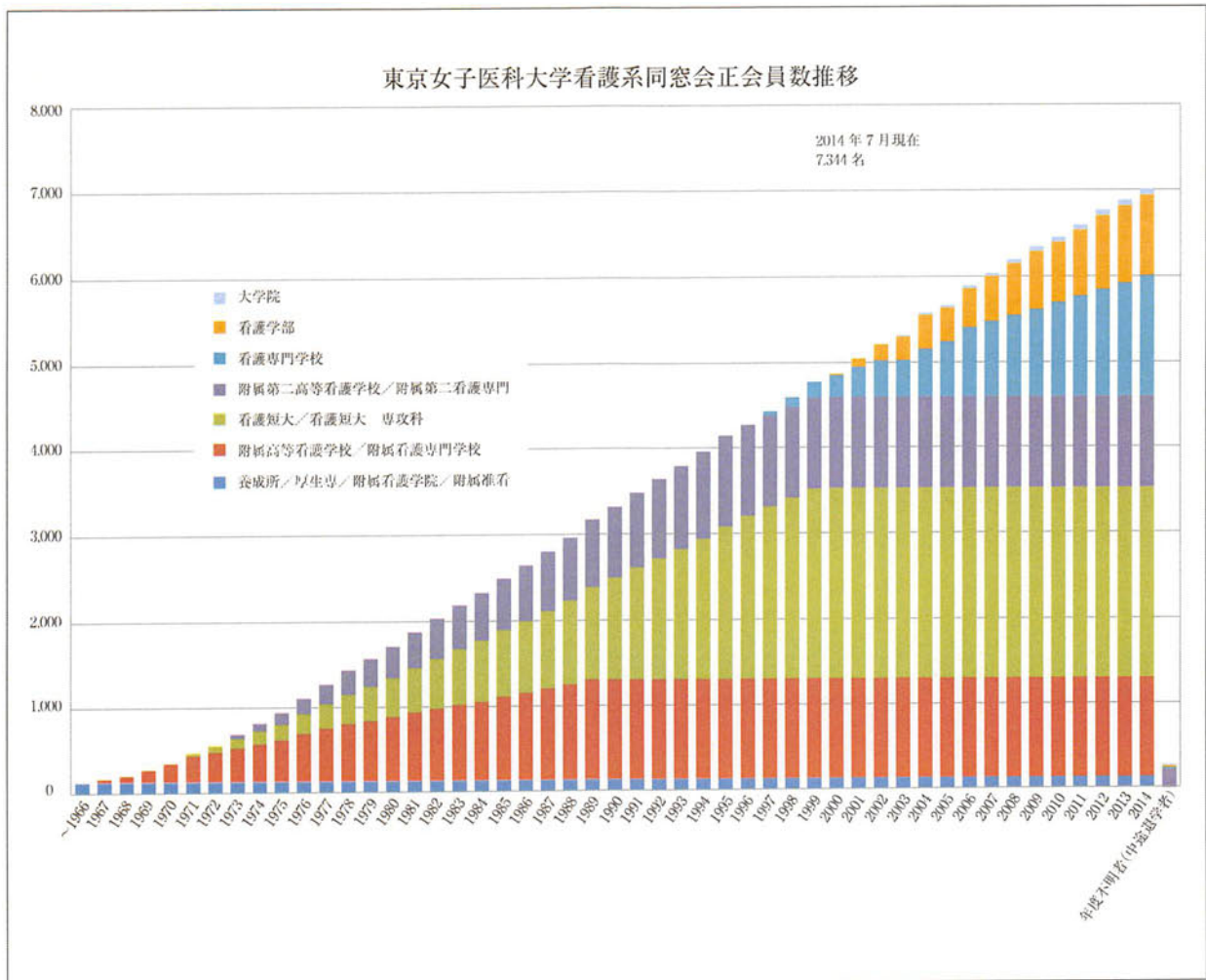
新しいトピックスでは、現在、看護専門学校に隣接する東医療センターが荒川区における地域の中核病院として、医療健康サービスの向上を目指す大学病院として、患者さんに高度医療を提供しています。将来的には、足立区へ病院を移転する計画が決まりました。

会員の皆様とともに母校の発展のために「今、同窓会として何をなすべきか、何ができるか」を考えながら進んでまいりたいと思います。

同窓会会員の皆様のご今後のますますのご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

平成27年度東京女子医科大学看護系入学生数／  
平成26年度東京女子医科大学看護系卒業生・修了生数

	平成27年度入学生数	平成26年度卒業生・修了生数
看護学部	90	88
看護専門学校	88	88
大学院博士前期課程	19	16
大学院博士後期課程	1	1



## 平成27年度 看護学部・看護専門学校教員一覧

### 【看護学部】

#### ■基礎科学系

生理学  
生化学

准教授 神山 暢 夫子  
准教授 伊東 栄 子

#### ■人文社会科学系

心理学  
社会学  
英語

准教授 松崎 英 士  
准教授 諏訪 茂 樹  
教授 設楽 靖 子

#### ■臨床医学系

外科学  
内科学

教授 尾崎 恭 子  
准教授 南家 由 紀

#### ■看護学系

基礎看護学

教授 守屋 治 代  
准教授 菊池 昭 江  
講師 加藤 京 里  
講師 見城 道 子  
助教 小宮山 陽 子  
助教 林 由 佳  
助教 稲野 奈 緒  
助教 飯岡 由 紀  
准教授 原 三 紀  
講師 原 美 鈴  
助教 河合 育 世  
助教 小林 礼 実  
助教 小鈴木 香 緒  
助教 那須 実 千  
助教 三浦 美 奈  
助教 峯川 美 弥  
教授 水野 敏 子  
講師 坂井 志 麻  
講師 原 沢 のぞみ  
助教 成澤 明 治  
助教 渡邊 賢 治

成人看護学

老年看護学

小児看護学

母性看護学

地域看護学

精神看護学

看護職生涯発達学

認定看護師教育センター

教授 日 沼 千 尋  
准教授 関 森 みゆき  
講師 青木 雅 子  
講師 奥野 順 子  
助教 櫻田 章 子  
教授 小川 久 貴  
講師 竹内 道 子  
講師 宮内 清 子  
助教 潮田 千 寿  
助教 鈴木 小 弥  
助教 田幡 純 子  
教授 清水 洋 子  
教授 柳 修 平  
准教授 中田 晴 美  
講師 犬飼 かおり  
助教 伊藤 昌 子  
助教 高 紋 子  
助教 吉 澤 裕 世  
教授 田中 美 惠  
准教授 濱田 由 紀  
講師 小山 達 也  
助教 異儀 田 はづき  
助教 飯塚 あつ子  
教授 佐藤 紀 子  
准教授 吉田 澄 惠  
講師 草柳 かほる  
助教 山 内 英 樹  
(平成27年4月1日現在)

### 【看護専門学校】

主 事 小川 悦 代  
教務主任 藪 絵美子  
柳 沼 厚 子  
舟 橋 陽 子  
秋 山 千 里  
濱 谷 敦 子  
田 中 美由紀  
村 上 由 香  
相 原 亜 紀子

杉 山 貴 子  
齐 藤 美 鈴  
沼 尻 裕 美  
山 本 惠 子  
佐 藤 智 子  
平 山 まゆみ  
坂 梨 志 津子  
浦 川 寿美子  
前 田 美 那子  
(平成27年4月1日現在)

# 東京女子医科大学看護系同窓会 第15回総会報告

日時：2015年6月13日(土) 13:00～13:50

会場：東京女子医科大学 看護学部第1校舎123教室

開催に先立ち物故会員への黙祷が行われた。次いで、大熊あとよ会長の挨拶の後、議長に宮本嘉代子氏、書記に細貝恵子氏が選出された。

なお、開催時の出席は理事14名、一般89名の計103名と報告があり、第4章13条2)に基づき総会が開始され、以下の議題について、報告ならびに審議がなされた。

## 議 題

1. 平成26年度事業報告
2. 平成26年度決算報告
3. 平成27年度事業計画案
4. 平成27年度予算案



## 審 議 事 項

### (1) 平成26年度 事業報告

#### <庶務>

1. 理事会・代議員会での司会、書記担当表作成
2. 理事会および代議員会議事録配信
3. 理事・代議委員名簿作成
4. 会員証の発行
5. 議事録管理
6. 会員名簿管理(株式会社サラトへ委託)
  - 1) 看護学部・看護専門学校・大学院卒業生名簿登録
  - 2) 名簿修正依頼
  - 3) 配布物返送分の整理、名簿修正依頼
  - 4) 正会員数7,015名
7. 会員慶弔時手続き



#### <学生支援>

1. 同窓会オリジナルグッズの販売  
第10回東京女子医大看護学会学術集会、  
本院看護研究発表会、看護学部卒業式、  
その他随時販売した  
クリアファイルの発注なし
2. 臨床看護師への研究助成  
募集要綱の提示：ホームページと会報  
今年度は申請なし



#### <総会>

1. 2014年度 第14回看護系同窓会総会
2. 発送数 3,901通(うち未返信数 3,672通、宛先不明による返送数 54通)  
返信数 175通(出席:162通 欠席:8通 氏名・住所変更:50通 退会:6通 未記入:13通 重複あり)
3. 平成26年度事業報告および決算報告、平成27年度事業報告案および予算案は承認された

#### <会報・ホームページ>

1. 看護系同窓会報第14号の発行
2. 看護系同窓会ホームページの更新・運営  
・看護系同窓会報第14号のPDFのアップ



上記について、各副会長から報告があり、賛成多数で承認された。

### (2) 平成26年度 決算報告

篠聡子会計担当理事から本報告がなされ、引き続き会計監査より同窓会会則第5章第20条に基づく会計監査結果、不適切な事項はなく正確に処理されていたとの報告があり、賛成多数により承認された。

### (3) 平成27年度 事業計画

#### <庶務>

1. 会員名簿管理（株式会社サラト委託継続）
2. 会員証発行（2015年度卒業生、各会員からの申請時）
3. 理事会・代議員会議事録管理（保管、理事・代議員へ配信）
4. 会員慶弔時の手続き
5. 特別会員、賛助会員へ年賀状発送
6. 同窓生、その他問い合わせの対応
7. 同窓会室備品・物品管理・整理整頓
8. 第6期理事へ引き継ぎ
10. 第6期理事・代議員組織図作成
11. 第6期理事・代議員名簿作成
12. 第6期理事会・代議員会司会、書記担当表作成

#### <学生支援・将来計画>

1. 同窓会オリジナルグッズの販売  
ホームページで同窓会グッズの紹介予定  
第11回東京女子医大看護学会学術集会、本院看護研究発表会、その他随時販売
2. 臨床看護師への研究助成  
募集要綱の提示：ホームページと会報

#### <総会>

1. 平成27年度 第15回看護系同窓会総会の開催

#### <会報・ホームページ>

1. 看護系同窓会報第15号の発行
2. 看護系同窓会ホームページの更新・運営

#### <会計>

1. 年間の予算化・収支決算、報告

上記計画について、大熊あとよ会長から報告され、承認された。また、2つの審議事項（第1号議案：会則第5条 3）賛助会員 4）特別会員の条件についてそれぞれ改定）について、賛成多数で承認された。

### (4) 平成27年度 予算案

篠聡子会計担当理事から本報告がなされ、過半数以上の挙手により承認された。



次回 第16回総会予定日：2016年6月11日（土）

東京女子医科大学看護系同窓会 会長 大熊 あとよ



## 懇親会における同窓会員とのなごやかなひととき

.....



## 看護職のキャリア形成

東京女子医科大学看護学部 看護職生涯発達学  
教授 佐藤 紀子



私は40歳まで臨床看護師として、その後は東京女子医大看護短期大学の成人看護学の教員として仕事をしてきました。教員になる前に看護大学の修士課程で「看護管理学」を専攻し、博士課程も「看護管理学」を専攻しました。「看護管理学」の人材育成は、組織に必要な人材を開発することだと考えますが、私の関心はひとり一人の看護職の側から見出され、創造される看護を知り、そのひとの目指す看護を実践できるように、看護教員として看護研究者として伴奏することでした。2014年度からは大学院看護学研究科で「看護職生涯発達学」分野を立ち上げ、教育・研究に従事していることを大変有難く思っております。併せて、学士課程においても、「キャリア発達論」という本学独自の科目を担当させていただいております。つまり、学士課程から卒後教育課程へと、看護職が成長発達する姿を常に見させていただいていることになります。

今回の講演では、30年前に出版されたベナー看護論<sup>1)</sup>について、現在の私の解釈をお伝えし、看護職が臨床で経験を積みながら成長あるいは変化する様相をご紹介しました。中でも強調したのは、看護を学ぶ学生（看護学生）は、最新のエビデンスに基づいた知識を学んでいること、そして社会の変化の中で求められる役割を学んでいることについてです。新人看護職を「何もできないひと」として見るか、「最新の知識を知っているがスキルの獲得はこれからのひと」として見るか、ひとは見られるように成っていくということを含めてお伝えしました。そして、熟達した看護実践をする人と臨床実習に臨む学生との類似性についても触れさせていただきました。現在は、クリニカルラダーが用いられ、看護職の成長の段階が示されていますが、それだけでは看護職の日々の経験やそこからの学びの貴重さを言い表すことはできません。このようなことから私が30年近く取り組んできた、看護職によって書かれた看護実践のエピソード（今では、ナラティブという言い方もされています）をご紹介し、看護学生や豊かな臨床経験を持つ看護職の姿をお伝えしました。その文章の行間からは、学生や看護職のもつ豊かな『知』を見出

すことができたのではないかと思います。

これからも、「より良き実践」をめざし、一人ひとりの看護職の持つ『知』を言葉として表す仕事に取り組んでいきたいと思っております。

最後に最近、ベナーの書いた著書<sup>2)</sup>から、私の心に残っている文章をご紹介します。

（前略）驚くほどの数の看護師が、実践の最も基本的な側面、すなわち、問題や、ひとりの人間としての患者に積極的に関わるといことが身につけていないのである。積極的に関わるには、綿密に準備した重要な方法で情緒的につながりを持ち、そのうえですぐれた臨床家の把握や考察、推論、判断、介入、やりとりを導く方法について学ぶ（または教わる）必要がある。（中略）

では、積極的に関わることを学ぶ、または教えるにはどうしたらよいのだろうか？当然のことながら、積極的な関わりは、熟練看護師の善の概念やケアの倫理が日常的に見られ、考察や判断、やりとり、介入が示されている実際の現場で最も目にすることができ、最も学習に適している。

- 1) 【原著】Benner P. From Novice to Expert: Excellence and Power in Clinical Nursing Practice, Commemorative Edition. Prentice Hall, 2001.  
【翻訳】井部俊子(監訳)：ベナー看護論 新版—初心者から達人へ—。医学書院, 2005.
- 2) 【原著】Benner P, Stannard D, Hooper-Kyriakidis P et al: Clinical Wisdom and Interventions in Acute and Critical Care, Second Edition: A Thinking-in-Action Approach. Springer Publishing Company, 2011.  
【翻訳】井上智子(監訳)：看護ケアの臨床知—行動しつづつ考えること(第2版)。医学書院, 2012.
- 3) 【原著】Malcolm S. Knowles: Andragogy in Action: Applying Modern Principles of Adult Learning. Jossey-Bass, 1984.  
【翻訳】堀薫夫、三輪建二(訳)：成人教育の現実的実践—ベダゴジーからアンドラゴジーへ。鳳書房, 2002.
- 4) 柳田邦男、陣田泰子、佐藤紀子(編)：その先の看護を変える気づき—学びつづけるナースたち。医学書院, 2011.
- 5) 佐藤紀子：看護師の臨床の『知』—看護職生涯発達学の視点から。医学書院, 2007.
- 6) 佐藤紀子：《連載》師長の臨床, 看護管理, 22(9)-23(6), 2012-2013.
- 7) 佐藤紀子：変革期の婦長学。医学書院, 1999.
- 8) 【原著】Benner P., Sutohen M., Leonard V., Day L.: Educating Nurses: A Call for Radical Transformation. Jossey-Bass, 2009.  
【翻訳】早野 ZITO 真佐子(訳)：ベナー ナースを育てる。医学書院, 2011.
- 9) 【原著】Benner P., Wrubel J.: The Primacy Of Caring: Stress and Coping In Health and Illness. Prentice Hall, 1989.  
【翻訳】難波卓志(訳)：ベナー／ルーベル 現象学的人間論と看護。医学書院, 1999.

## 専門看護師としてのキャリアの構築

東京女子医科大学病院 社会支援部

がん看護専門看護師・エキスパートナース 佐藤 由紀子



このような機会をいただき大変光栄であり、恐縮しております。私は福島県出身で、看護短大の26回卒業生です。看護学生時代（Novice）は、原三紀子先生のご指導の下、貴重な実習体験をさせていただきました。脳血管障害の患者さんの四肢麻痺の回復や障害受容の過程など、全てのことにひたすら感動していました。

1997年に入職し脳神経センター4階に配属となりました。新人（Beginner）の時は、先輩方からフィジカルアセスメントについて丁寧に指導を受けました。また一回の訪室で患者さんの観察とアセスメントを行うこと、話を聴き心理的支援を行い環境整備をしてから退室する行動を教わりました。当時は先輩方に迷惑をかけずに早く一人前になりたいと考えていたと思います。一人前（Competent）の時期は、脳腫瘍の終末期の患者さんを担当し、寄り添う家族の心理的支援に難渋し、退院困難な患者さんの外出・外泊支援をするなど看護の幅が広がり忙しく日々挑戦していました。一方では看護学生さんの実習指導を経験していました。看護の素晴らしさに感動しきりだった学生時代の自分を忘れ、仕事をいかに早く効率的に終わらせるかということに傾いている自分に「異和感」を感じた時期でもありました。今思えば、何のために何のエビデンスに基づいて看護を行うのか、自問自答していた時期だったのかもしれない。

6年目の時に早稲田大学第二文学部思想・宗教専修に入学し、現象学をはじめとした哲学や、宗教、倫理などを学びました。今までの自分は患者さんの全体像を観察項目という眼鏡で見て、正常か異常かで判断していたことに気づきました。まずは患者さんに起こっていることを現象として捉え、その背景を分析する志向を得たと思います。このような志向は一見学生時代の実習に体当たりする姿に似てはいますが、現象に対して看護理論や専門知識を応用し分析して実践に結びつけるところが熟達者（Proficient）として学生と異なる部分であるように思います。

看護師10年目の時に脳神経領域以外の看護を経験することでより一層看護の意味を考えるようになり、研究的な思考や方法論を学ぶため大学院に進学したいと思い退職しました。

東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科在宅看護学分野ではがん看護CNS教育課程の単位も同時に取得しました。

卓越した実践者（Expert）スペシャリスト（Specialist）を目指して2010年に再就職し、2011年にCNSの認定を受けました。現在社会支援部で退院調整看護師をしながら、がん看護CNSとして特にグリオーマの看護の質の向上プロジェクト（QI）に取り組んでいます。

私にとって学生時代の実習体験は今でも看護の礎となっています。また看護学生さんが臨床に実習に来てくれることは臨床看護師が自分の看護を省察できるメリットがあると考えています。CNSとして、看護教育や臨床研究などを通して大学（学問）と病院（実践）の架け橋となることが私の今後の夢です。



## 同窓生の動向

### 女子医大の仲間に支えられて！



看護専門学校25期生 尾崎 直美

卒業してたくさんの月日が流れました。看護について先生・学生同士と交した熱いディスカッションや厳しかった看護実習のことは今でも覚えています。卒業後は本院の手術室や循環器ICUなど経験し2001年より放射線科看護師として勤務し、女子医大の「至誠」と「愛」に満ちた看護を学ぶ事が出来ました。手術室経験が長かった私は、手術看護に悩みながら、心身の緩和ケアとともに予測を踏まえた正確な技術と対応力の重要性を学び、医師・看護師などとのチーム医療の達成感を感じていました。そして、看護師としての経験はベテランとなりました。しかし、配転することで、狭い範囲の看護経験でしかないことに気づかされました。また、自分の知識不足やチームメンバーとのコミュニケーションへの課題が明らかとなりました。自分を否定する場面や、葛藤し、考えがまとまらず整理できない苦しい時期もありました。私が悩み立ち止まったときに、先輩や25期生のアドバイスを沢山いただき、今日まで看護職を続けることが出来たと感じています。

「みんなちがってみんないい！」女子医大看護部の考えを現した言葉を読んだとき、先輩や同期は私の良い点・課題など認めた上で温かく見守りくださったと実感しました。なぜなら、悩んでいるときは見守ってくれ、自ら変化したときにフィードバックされ、承認された経験が何度となくありました。褒めて伸ばし、やる気にさせる先輩が多いと感じています。その後放射線治療看護の専門性を深めるために、がん放射線療法看護認定コースを卒業し、今年で認定看護師として4年目を迎えることが出来ました。現在、がん治療看護の諸先輩方のサポートの上に活動しております。今後も患者の放射線治療への不安や有害事象へのケアを通し、放射線治療を完遂できるように看護を深めたいと思います。また、切磋琢磨しながら魅力ある女子医大看護に携わり、諸先輩に学び後輩とともに頑張っていきたいです。

### 支えられて支える風土づくり



第二看護専門学校11期生 福田 浩美

同窓会員の皆様におかれましては、日々ご活躍でお過ごしのことと存じます。本院に勤務して34年たち、現在、神経精神科で師長として勤務をしています。私は、「正看護師になりたい」と広島から東京に上京して、東京女子医科大学病院本院に就職し、第二看護専門学校に入学しました。

「東京女子医大の先進医療についていけるのだろうか?」「患者により良い医療を提供するために私は、医師とどのように調整してゆけばいいのか」と葛藤しながら、揺らぎながら現在も進んでいます。そして「患者にとって望んでいることはなんだろう。」「患者らしく生活できるように看護として提供できることは何だろう」と考えて仕事をしてきたように思います。その教えは、第二看護専門学校の小川悦代主事をはじめ、私のような不器用な人間に対してあきらめず、根気よく関わってくださった先輩方の指導の基に培われたものです。また、私が「こんな看護がしたい」と思った時に「やってみましょう」と言って下さった先輩たちや病棟の風土がありました。

そして今でもとても自由で温かい雰囲気と関係の中でのびのびと看護を行えています。このような“やりたいことが自由に行える風土”こそが、東京女子医科大学の看護の強みだと思います。これからもこの風土を受け継いで患者さんにとって良い看護と思うことをスタッフたちが実行できるように支えていきたいと思っています。

今、東京女子医科大学は、苦境にたたされています。しかし、こういうときだからこそ怯むことなく同窓生が一丸となって明るく、当大学の風土を大切に、これから患者さんのためにあるべき方向に変わって前進する原動力になればと思っています。これまでいただいた教えに感謝しながら、日々の研鑽を怠らず行動していきたいと思っています。

## 助産院の開設、そして新たな挑戦

看護短大22回生（専攻科14回生） 岩田 美也子（旧姓 山田）



女子医大の助産専攻科を卒業後、東医療センター（旧第2病院）に4年間勤務し、学生時代からの夢でした開業を目指し、日本助産師会が主催する「開業のための長期研修（1年コース）」の旅に出たのが17年前でした。当時、日本の代表と言える東京・大阪・奈良の助産院での泊まり込みの分娩研修は、大学病院にたかが4年勤めて一人前の助産師になったつもりだった私にとって、大きなハンマーで頭をガーンと叩かれたような衝撃の連続でした。病院でも少しずつ取り入れ始めていた「フリースタイル出産」や完全母乳育児へのアドバイス、助産師が行う妊婦健診（超音波エコーも！）など、どれもこれも新鮮で、興味深いものでした。開業の大先輩に叩き込まれた「技」は、その後の私の助産師活動に大きく影響して、一歩でもいいから踏み出そうと、卒業と同時に出張分娩（自宅出産）専門の「なごみ助産院」を開業いたしました。最初の年は2件、次の年は1件の分娩で、新生児訪問やデパートの育児相談コーナーを担当したり、産科クリニックで夜勤バイトをしたりで何とか食いつないでいると、3年目には13件、4年目には24件と自宅出産依頼が増えていきました。その後は年間30件程度の依頼が有り、今日に至っております。病院勤務ではドクターの補助する形で眺めていた緊急時の対応でしたが、開業したからには、母と子の2つの命を預かって安全にかつ安心したお産にするために、緊張しながらも緊急時の対応に全力を注ぎ、母の生む力、家族の協力で助けられながら、16年間無事にお産のお手伝いをする事ができました。

そして今年の春から、川崎市内の施設を構えている助産院を手伝い始め、その助産院の4代目院長を目指しています。施設のある助産院ですと今までの自宅出産専門とは規模が違い、スタッフも大勢抱えながらの経営になります。果たしてやれるのかと不安もありますが、これも何かのご縁で導かれた氣もします。あと残り少ない助産師人生、私なりに精一杯頑張っていこうと思っています。

## 夢に向かって邁進中

看護学部7回生 田中 由似



卒業から早8年。1年目にNICUに配属になり、保育器や呼吸器、その他の様々な機器が無数にある病棟は、異質にしか感じられませんでした。しかし、3年目ぐらいになると、未熟児のケアやプライマリーの経験など経て、いつしかさまざまな機器に萎縮するのではなく「必死に生きようとする子供やその子供を支える家族の力になりたい」という思いに変化していきました。

NICUを卒業生した子どもの中には、さまざまな医療行為を退院後にも必要とする者が多くいます。医療行為を要する場合「母親が社会復帰を望んでも、預かり先がなかなか見つからない」という現状がある家族から伺ったことがありました。もともと、保育園に携わる看護師を目指していた私にとって、新たに病児保育という視野が広がるきっかけになったのがこの一言でした。

これをきっかけに、現在は地域病院の小児科へ就職してさまざまな小児疾患を学び、いつか病児保育に携われるよう日々邁進しています。いつか、医療行為が必要な子どもと家族が、無理なく過ごせる環境づくりの力になればいいなと思っています。

## 節目を迎えるたびに見えてくる何か

看護学研究科博士前期課程（2005年度入学） 土本 麻知子



私と東京女子医科大学との関係は13年前にさかのぼる。当時、周産期センターで勤務していた時に、近隣の施設から母体搬送となった20代の女性が搬送の30分後に死亡した。わが子を一度も抱けないだけでなく、最愛の家族と最後の言葉を交わすことなく死んでいった母親とその家族に、看護らしい看護というものをなにひとつできなかった。きっと、同年代の女性の死というだけでなく、出産の目前である幸せの絶頂期にある中で突然死についてどう向かい合うべきかわからなかった。悩んだ挙句、恩師である久米美代子先生に相談した。「いったん臨床を離れて、もう一度看護を学問として学んでみたら」と先生に言われ、私は科目等履修生として東京女子医科大学の門をくぐった。それから、博士前期課程へと進学したのが助産師10年目の節目の年であった。ここで知り合った同級生たちの多くは、今もなお各分野でその専門性を生かしたスペシャリストとして活躍されている。このすばらしい自慢すべき同級生と2年間も一緒に勉強できたことを心より誇りに思う。

では、私はというとどうだろう。卒業してからのこの10年、ほとんど功績らしいものを何ひとつ残せないでいる。なんとも情けない話である。まさに、気分は石川啄木の短歌にある。「友がみなわれよりえらく見ゆる日よ、花を買ひ来て妻といたしむ」そんなセンチな気分である(笑)。私の場合、花を買っても一緒に楽しむ配偶者がいないので、そんな時はどうするべきか。こんな時こそ、今、私なりにできることを邁進して取り組むべきであろう。

日本看護協会などの5団体も、低リスクの分娩を1人で行える助産師を認証する制度を今年の8月から始めた。その申請にあたり、研修を受けて書類審査と試験に合格しなければならない。この制度が今後も継続されていくかは、正直わからない。しかし、助産師20年目の節目にいかんなく臨むには悪くない代物である。私なりに少しずつ自慢すべき友に追いつきたい。

## 看護を語ることの素晴らしさを信じて

看護学研究科博士後期課程（2010年入学） 鈴木 麻美



私は、2007年に博士前期課程に入学し、博士後期課程修了までの7年間、女子医大で学ばせて頂きました。くじけそうになったり、落ち込んだ時もありましたが、水野敏子教授をはじめ、多くの先生方、学務課の皆様、そして学びをともにした多くの仲間を支えられ、乗り越えることができました。修了後1年半たった今となっては、すべてが私の大切な宝物です。

私は今年度から東京都済生会中央病院の看護教育センターの師長として仕事を始めました。今は、多くの看護師がそれぞれのキャリアデザインを描けるよう、研修の企画運営や看護研究のサポートをしています。臨床の看護師と関わる時は、実践している看護を語ってもらい、実践している看護に気付いてもらうことを大切にしています。臨床で働く看護師の多くは、一生懸命、患者のケアを実践していますが、そのためか、なかなか自分の看護を振り返る機会が持てないのが常です。そんな看護師たちに印象的だった看護場面を思い起こしてもらうことは困難なこともありますが、今、行っている看護の一場面を話してもらうと、実は多くのことを見て、聞いて、感じ取りケアをしています。「〇さんの観察力、すごいですね」などと伝えると、始めは「そうですか？」と不思議な表情をしますが、話を深めていくと次第に「私、看護、してるんですね！」と目が輝いていきます。こんな時、私は看護を語るこの意味や大切さを再確認するとともに、看護の力を実感させてもらっています。

私は脳卒中患者の看護、中でも失語症患者やその家族の看護が在学中からの研究テーマでした。実践者として患者や家族に看護を提供したい気持ちもありますが、今はその気持ちを少し抑え、質の高い看護を実践できる後輩看護師の育成に力を注いでいきたいと考えています。女子医大で学んだコツコツと一つずつ積み上げていくことの大切さを胸に、新しい環境でもコツコツと頑張っていこうと思っています。

## 同窓生からのメッセージ 【短大22回生(1992年度卒業)】

2015年3月8日(日)に新宿の京王プラザホテルで10年ぶりに短大22期生の同窓会を開催しました。関東近辺に在住する35名が集まり、学生当時の懐かしい話で盛り上がりました。その日のうちにラインのグループでもつながり、また5年後、10年後にも集まろうと約束しました！皆さま、この場をお借りして、住所変更手続きが無事、完了致しましたことを報告いたします。お手元に会報は届きましたか？以下、同窓会時にいただいた35名のメッセージと写真です。

清水(坂井)たかちゃん：クリニック勤務と3人の子育てで慌ただしい日々を送っています。

柿澤(松永)：わかちゃん：久しぶりにみんなと会って刺激を受けました。今は子育てしか頑張っていないので、これから何か頑張れることを探します。

星加(高橋)：みえちゃん：卒業して6年間女医でお世話になり、今は地元の新座でデーターサービスの仕事をしています。

鶴身(岡本)：けいちゃん：学校の保健室で働いています  
有井(森)：みかちゃん：中2と小3の女の子の母です。女子医大の脳神経センターで12年働き、今は外来センターで仕事をしています。

三浦(千明)あさき：横浜で働いています。

渡辺(小島)れいこちゃん：エンゼルケアを極めるために頑張っています！二児の働く母さんです。

吉田(武井)たけびい：就職活動しようかと思っているところです。高2、中3、年長男子3人の母親です。

野口(松原)ゆか：子育てと仕事の両立に頑張っています。看護師資格はとても役立っています。

貞弘(石原)ひとみちゃん：訪問看護ステーションを立ち上げて働いています。

伊藤(進藤)けいちゃん：現在子育て中です。皆さんからステキな刺激をいただきました。

山田(軍司)ぐんちゃん：家事・育児の追われながらも看護師頑張っています！！

日下(杉野)まりこ：成田で2歳の長女を育てながら仕事とかけもちで頑張っています♡

吉田：かこちゃん：糖尿病専門医で働いています。

斧：ゆきこちゃん：またお会いするのを楽しみにしています。

嶋田：まきちゃん：電子カルテを入れる仕事をしています！

廣川：ゆかちゃん：今も女子医で働いています。

町田(初山)むーみん：いまだに女子医大の外来で頑張っています。

目崎(西村)まゆみん：クリニックにて勤務中です。内視鏡をメインに頑張ってます。

福井(山川)りっちゃん：埼玉県内で保健師してます。

長尾：がお：今は看護師としてクリニックの外来でのんびり働いています。

岩田(山田)みやさん：開業して16年！元気に助産師やってます！

猪俣(小川)まなちゃん：地元の産婦人科クリニックで働いています。

山本(大貫)ゆうちゃん：新しいことを探しています。

山内：てんこ：気づけば人生の半分以上、女子医大にいます。

有金(大渡)たまきちゃん：茨城でICUナースをしています！男子3人のママです。

平野(谷田川)：ともちゃん：子ども5歳で、パート始めました！

山根(矢野)やの：子育てしながら整形外科病棟で頑張ってるよ～！

折本(及川)：おいちゃん：助産師として勤務しています。

堀内(内田)しゅみちゃん：子育て頑張ってます。

平岡(長谷川)まみちゃん：子育て中。何か仕事も考えていこうと思ってます。

田中(前田)よっちゃん：みんなに会えて仕事を再開させようかなと思えました。

石川(荒井)みゆ：子育て中です。

中井(磯田)なほ：これから訪問看護に向けてがんばる！

木田(今井)いままさん：外来で夜勤もしながら頑張っています。

山本：やっちゃん：助産師で頑張っています。



同期のみなさん、メッセージのご協力ありがとうございました。今回、名簿が整っていないなか、人づての呼びかけとなり、声をかけることのできなかった方が多くいらっしゃいます。そこで、これを機に最新の名簿を作成することにいたしました。今回ご参加が難しかった方、またつながりのある同期のご友人にも、この会報をご覧になったら、山内(yamauchi.noriko@twmu.ac.jp)までお知らせくださいますよう声かけをお願いします。また、毎年開催される全体の同窓会総会・懇親会(p24)にも是非ご参加ください！

毎年、同じ出身校の同期の同窓生の皆様からのメッセージを掲載しております。

掲載にご興味・ご希望のある方は、会報・ホームページ係(koizumi.masako@twmu.ac.jp)までお問い合わせください。

## 東京女子医科大学病院のエキスパートナースの歩み その1

—エキスパートナース制度が導入された時代（1990年代）—



本号より「東京女子医科大学病院のエキスパートナースの歩み」を3回連載でお届けします。

女子医大の「エキスパートナース制度」の導入には、「チームナーシングからプライマリーナーシングへの移行」を目指した当時の看護界と病院事情の歴史的な背景があります。

日本の病院・施設の看護界では1980年代後半以降、プライマリーナーシングにより質の高い看護を提供する動きが高まっていました。プライマリーナーシングは一人の看護師が複数の患者を受け持ち、アセスメントから計画立案、実施、評価までを一貫して行う看護方式です。ここには、看護師一人ひとりの責任のある実践力と的確な判断力が求められます。一方で、当院では1991年4月、大幅な看護師不足の予測から、20床以上の病棟は一律20%減の稼働率で出発させなくてはならない状況にありました。

当時看護部長であった藤枝知子先生はこの打開策として「プライマリーナーシングによって学生からの魅力を上げることで採用者数を増やすこと」、また「管理職の道を選ばず患者ケアを追求し続ける看護師の待遇改善としてエキスパートナース制度を作り退職者数を減らすこと」を掲げました。そこには「プライマリーナースを育てるためにエキスパートナースを必要とする」という明確なねらいがありました。そして、1993年4月、エキスパートナース制度は正式に制度化されました。当時、日本看護協会や看護系大学協議会でも専門看護師制度の検討がなされているさなかにあり、そこでいう「スペシャリスト」との混同や混乱を避けるために「エキスパートナース」という名称になりました。

今回、エキスパートナース制度が導入された時期にご活躍された4人の先輩方に、その当時を振り返ってお話いただきました。犬塚信子さんは第1期エキスパートナース（腹膜透析専門）としてご勤務後、2001年に医療法人社団光靖会理事として、また3つのクリニックの総師長としてご活動されています。鈴木登万さんは、第1期エキスパートナース（小児循環器専門）で、2011年に看護部教育担当主任に就任されました。野沢利江さんは、第2期エキスパートナース（がん専門）を勤められ、1999年から日本テレビ人事局日本テレビ診療所で勤務されています。松本幸枝さんは第1期エキスパートナース（呼吸・救急専門）で、2005年に榊原記念病院看護部に就職され、現在、救急看護認定看護師、急性・重症患者看護専門看護師の資格をもつ管理者として活動されています。なお、インタビューと構成は、同窓会会誌委員の山内が担当しました。



左より犬塚様、鈴木様、松本様

### 管理者かエキスパートナースの選択

師長さんにこれから管理者かエキスパートになるかを問われたときに、ベットサイドにいたいし、単純にエキスパートのほうが自分にあっていると思って、そう答えた記憶がある。今はともかく、当時は管理の仕事がおもしろそうに見えなかった。「管理は現場から離れる仕事」というイメージがあって、経験を重ねた人が管理者になる流れみたいなのは違うなと思っていた。「現場にこだわり続けたい」とは思いつつ、でもそれならばエキスパートナースの試験を受けなきゃいけないのか、その選択が微妙に難しかった。「とりあえずとってみたら」という雰囲気の中で「エキスパートってそんなものじゃない」という反抗心があった。周囲には「何する人なのか」ははっきり示されていない中で、三交替をしながら相談業務が増えていくのはきつく、正直手当金の3万円は重かった。昨日と今日の自分は変わってなくても、「エキスパート」という肩書がつくだけで周りの見方が変わった。そこに期待する部長からの風当たりもきつかった。

制度化される前に説明会があって、条件を満たしている人は、みんな来てくださいということで、結構参加していた。試験問題は全科から出題されてとても難しかった。1期生は7%の合格率だった。

エキスパートナースになる条件は、臨床経験8年以上と一次試験（筆記試験、小論文）、二次試験（面接）に合格することである。1992年秋に第1回の試験が行われた。試験に先立ち、受験資格者への説明会を4回に分けて開いた。本試験は管理職への道を選ぶか、臨床看護の実践家としての道を選ぶかの大切な岐路であるので、十分理解して選ぶように考えた。またエキスパートナース制度は看護婦達にとっては寝耳に水のようなもので、一人一人が十分に理解できたとは思われないまま試験になったぐらいもあった。

文献1)より

### 自分の専門性を問い、他者に伝える苦しさ

何もないところからのスタートだったのでとても苦しかった。今の自分がこれでいいのかな、これでいいのかな、といつも何かを探していた。わからないことばかりで、みんなで雑誌や文献を読んで海外の専門看護師（以下CNS）についても調べて、その先を走る病院に見学にも行った。「エキスパートとは何か」という勉強会を1年かけて行ったが、結局、自分のスペシャリティが見いだせないまま時間だけが経っていった。スタッフ向けに勉強会を開催しても「エキスパートってこんなもんですか」とアンケートに書かれることがあった。

部署でも当時、本当に忙しかった。エキスパートの最後の頃、大学の科目等履修に通っていた。そのようなときにコンサルテーションが入ると、相手の勤務の都合で休みの日に来るしかないことも多かった。休みの日にコンサルテーションに来ていたら、最後の1年間は女子医大に行かない日が1日も無かった。昼休みにも行っていた。

実践とは何か、自分は何をなすべきかと自分の中でこだわり、認定看護師制度ができたときに本格的に学ぶことにした。しかし、何かが変われるという期待とは異なり、自分の中では何も変わらなかった。「院内の呼吸困難感のある患者さんを少しでも楽にしたい」と専門看護師を目指したが、卒業後当時の看護部長から「当院ではCNSは必要ない」と言われ、価値がないと評価されているように感じてとても傷ついた。そして「自分の看護を別の場所で役立てたい」と考えはじめた。しかし、そのときにもう少し交渉力や政策能力があれば、違う選択をしていたのかもしれない。当時はすごく苦しんでいた。

新人看護婦が職場に慣れるまでの期間は、病棟の一看護婦としての役割を果たすことに追われ、エキスパートとして、自分が思い描くように動けず、婦長・主任・病棟看護婦達と必ずしも調和がとれた動きにならず、悩む日々にもなっていたようである。看護界ではちょうどスペシャリストについて討議されている時でもあり、外部からの取材や投稿の依頼、シンポジストとしての出演の依頼などにより、エキスパートナースとしての自覚が高まる一方、専門領域による活動条件の差などもあり、自分の動きに自信がもてず、仕事への満足感が低い結果となった。

文献1)より



1期生のエキスパートナースたち

### 管理者による理解の難しさ

エキスパートナース制度は、藤枝看護部長の一つのビジョンを具現化したものだと思う。本当に立派な方だった。自分たちは、認知されるためにできることを悶々と考え、いろいろアプローチした。自分にも相手にもどう表現すればやっていることややりたいことを伝えられるのかを常に考えていた。おそらく管理職の人たちもエキスパートに対して認めなくてはならないけど、認めたくない複雑さもあったと思う。

そんな中「エキスパートナースの専門性を管理者がどう活用するか」をテーマに高橋美智先生に勉強会をしていただいたとき、高橋先生はエキスパートと管理者は違うということ、エキスパートナースも1年目と10年目では、実践の中身が違うことを話され、婦長さんにはそういう目で育ててほしいと訴えていた。管理者も当時は私たちに対する対応の仕方がわからなかったのだと思う。管理者たちも不安だったのだと思うが、対立するのではなく看護の専門性や管理職という役割を構築するには、多くの時間がかかることはわかった。当時は年功序列の色が濃かった。当時、宮原副部長の「時代とともに、エキスパートも管理者も変わっていく。エキスパートがどのように生きていくかはあなたたち自身が考えていくべきこと」という言葉に支えられた。今、その言葉の意味がわかる気がする。

### 自分にできることの模索

当時、臨床工学士の資格を持っている認定看護師でエキスパートという存在が珍しかった。他部署の看護師向けに「看護の視点から人工呼吸器に関連するケアについてご相談ください」とインフォメーションしたところ「なぜ看護師なのにそういう仕事をする。それは臨床工学士の仕事だろう」という他部門からのクレームが入った。今のような「協働」

とか「チーム医療」という言葉もない頃だった。かたちとしては見えにくかったけれど、家族の危機的な介入についての相談を受けたときは自分の役割を感じとっていた。

がん看護のコンサルテーションでは、化学療法やターミナルケアの相談があったが、自分が特別な知識や打開策をもっているからではなく、実際に一人の患者さんの様子を見て、すでに十分ケアされているとスタッフに伝えるだけで満足してもらえることが多かった。それで安心するスタッフの反応をみて「あ、そういうことなんだな」と思い、逆に自分もこれならやれるとホッとしたりした。10年ちょっとの経験の自分にもそんなに多くの引き出しがあるわけではなく「今のケアでいい」と伝えることが、現場でお互いにできるかどうかが大切だと思った。つくづく現場って孤独だと感じる時があった。

#### 看護を通して育まれる自分の価値観・エキスパート性

1990年代の初めは、EBM（根拠に基づいた医療）と言われはじめた頃で、エキスパートにはそれが常に求められた。部署の習慣や作法、文化の中で行っているケア一つひとつに意味や根拠があることを示せるのがエキスパートナースだったと思う。それを探求して示すことで自分のエキスパートとしての存在を確認していた。自分のスペシャリティは循環器の小児看護で、ほとんどの患者は自分の部署に入院していたので、あまりコンサルテーションはなかった。そこで自分が提供していた看護は、たとえば夜に自分が担当のときには安心して眠れるとか、尿量が少なくなってきた患者さんに早めにカテーテルを入れるとか、先生に1枚写真を撮る提案をするとか、バイタルとか観察したことを統合して適切に判断することを後輩に見せることだった。それを一緒にやることで少しずつ後輩たちが自分のものにしていく。その過程で、「これで良かったんだよ」と背中を押して承認する。今も自分がエキスパートの目を持ってやっていると思うのは、エビデンスを必ず確認するところ。「この文書の出所はどこだろうか、ケアの根拠は何だろうか」といつも気にして確認している。

腹膜透析の専門として「自分が自分の主治医だ」ということを常に患者さんに伝え、その考えを自分の中に確立してもらっていた。その患者に協力する家族のことも気を配っていた。生活者としての患者、家族というとらえを大事に、感染を起ささないための手技や環境の工夫を身近な存在として伝えていた。その場の業務だけではなく、この先にある患者の生活や時間をみている。人は心、魂、体が一

緒になって生きていることを思えば、看護の視点は何の科でも共通している。西洋医学は、手術して身体を部品扱いして悪いなら取り替える発想だけど、そこに心や魂を見る視点が抜けると患者は治らない。



学生への実習指導の場面

#### エキスパートナース1期生の専門領域

- ◆感染管理
- ◆手術看護
- ◆先天性心疾患術後看護
- ◆小児循環器看護
- ◆母性看護
- ◆心疾患術後急性期看護
- ◆呼吸・救急看護
- ◆腹膜透析看護
- ◆リエゾン精神看護

#### 当時の婦長さんに対して今、思うこと

コンサルテーションがくるところの婦長さんはエキスパートの活用に対してハードルが低い方たちだった。そうじゃないところは、コンサルテーションは来なかったように思う。患者さんのケアで何か困ったことがあっても、婦長さんの「それは病棟内でなんとか出来るでしょ」みたいな感じで止まっていた。エキスパートに相談することは、相談する側にも勇気があることで、自分の部署のスタッフが外に相談することを許容するのは、婦長さんたちにもそれなりに難しく苦しい段階だったのだと思う。私たちはそこでケアができていないと言うつもりは全然なくても、向こうからすれば、気が気じゃなかったのかもしれない。

そういったことを踏み越えてでも「相談してみたら？」と言って私たちを活用してくれた婦長さんたちはすごいなと思う。相手から「聞いて良かった」という返事があると自分もほっとするけれど、多分婦長さんたちも違う意味でほっとしていたのかもしれない。コンサルテーションではお互いに探りながらも一歩進む勇気が必要だった。

### 経験を積み重ねた今、わかること

今は、当時の経験を財産にして実践している気がする。何事にも昔みたいに動揺しなくなった。過去のいろんなところをたたけば、多分似かよった経験があり「ああ、そうきたか」と過去帳をめくり、そこから対処していくようになった。過去の経験の中に、宝物は全部埋まっている。いかにして過去の経験を頼りに、バラバラな体験ではなく、積み重ねたものをどう足し合わせるか。過去の経験の中に使えるものは絶対にあるという確信はもてた。そのおかげで今がある、色々なこと全てに対してそう思える。何事も経験だと思える。

若い頃は患者を助けたいという思いだけで頑張っていたけれど、今は、病気自体ではなくその人の「生活」をどう支えていけるかということを考えている。看護師は病いを癒やすのではなく、それをもって生活していく人たちを支える役割があることをこれまでの経験から実感している。

そして、人は何時か必ず死ぬということを前提で看護をするようになっていく。今、目の前にいるこの人は人生の最終段階であり、最期を病院で過ごすかもしれないと思うと、「どういうふうに生きていきたいのか、どういうふうに死にたいのか」とたずねることが役割だと思っている。自分たちもだんだん年をとってきて、そこに対する気持ちもよく分かるようになってきたからかもしれない。

### 看護は人間学であるという原点に行き着く

相手に説明するときに説得に走ることは無意味なこともよくわかった。「こうしたらこうなっちゃいますよ」という一方的な説得。医療者の前提になっている「説明をきちんとすれば相手に分かってもらえる」という考えが間違っているのではないかと思うようになった。医療者はまじめなので、一生懸命に説明しようとする。説明というよりは説得。それは私たちからすれば説明でも、相手にはとっては脅しにしか伝わっていない。まったく効果がないということがよくわかるようになった。相手に伝えるその瞬間を見つけるのはうまくなったと思う。「今しかない」というタイミングを逃さずに「これ、前にちょっと言ったかもしれないけど」みたいな、釣りみたいなものかと思う。

さっき魂という言葉が出たけれど、患者のスピリチュアルな痛みや苦しみについてよく考えるようになった。突然の病に、患者さんはなぜこうなってしまったのだろうと苦しんで、自分の人生を回顧しながら自分はどうかあるべきか、これからどう生きるべきかと苦悩している場面をよく目にする。その苦

しみを感じ取って、その人のいる空間に自然に入り込むことができるようになった。これは看護が科学だけでなく、自然学や哲学、人間学が含まれている学問だからだと思う。そのことはすごく面白く、人としてとても興味深いことだと思う。

ちゃんと薬を飲んでいる患者さんは一握りしかない。飲まなくて回復に影響していないと思えるような場面をみていると、病院って何なのかと思う。患者さんが求めているものは何か？ということから始まり、そこにぴったりとアプローチしていれば、まずずれない。説明はある意味、リスク回避を含めた医療者側の自己満足な行為なのかもしれない。



コンサルテーション(相談)に対応するエキスパートナース

### 管理者も担ってわかること

南裕子先生が看護協会の総会で「自分の部署のスタッフが看護ケアで困っている時に、一時的にケアの権限をCNSに委譲することでケアの質が変わり、スタッフも楽になる。CNS制度は患者さんのために必要な制度」と話されていた。看護や医療に限らず、目的を明確にして最も効果的な方法は何かと考えることが重要だと思う。そんな風通しがいい中で、人はのびのびと仕事できるのだと思う。

今、管理側にもなって思うけれど、多分個々が、エキスパートと管理を兼務する立場の人が増えたとしても、そうなる率はどう考えても少ない。そういうやり方ではなくて、その人たちが院内にいる病院は、難しい場面やケースで、スペシャリストを活用した結果を評価として出していく必要があるのだと思う。政策的な力が絶対的に必要。管理者が出している稼働率等のアウトカムは数字で出せるけれど、スペシャリストはそこがうまく出す力がないし、実際の活動の結果は数字で表せない内容も多い。ただ、実際にスペシャリストが使われない限り、結果も出していけないわけだから、資源としてスペシャリストを活用することは大前提だと思う。システムティックに動かしてこそ、お互いの発展につながると思う。エキスパートやCNSの鍛錬にもなり、



病院としてのレベルアップにもなる。看護学部の教員たちがこの状況をどう見ているのかも気になる。この問題は、教育側と管理者とスペシャリスト、この3つの関係がどういうバランスで取り組むことにかかっていると思う。

次世代にどう引き継ぎ、終わらせていくかを見据える

若さというのは苦しむことだから何かあっても当然だと思う。はたから見るとどうこうじゃなくて、自分にとってはこれでいいの、いつも何かを求めている。でも今は別の意味で考えることがある。藤枝先生が「私は看護の仕事を終えるときにはどうしても教育現場に戻りたい」っておっしゃって、看護部長を引かれた時のことを鮮明に覚えている。仕事を終わらせるためにはちゃんと準備が必要ということを教えてもらった。若いときにはまったく意識しなかったけれど、この歳になると、仕事でずっとできるわけじゃないことを意識する。定年が見えてきた時に、最後に自分がどういうところで仕事をしていくのか、どんな状態で仕事を終わらせていくのかを考えるようになる。自分の仕事をいかにして次の世代に引き継いでいくか。今、私が動いて物事がうまくいけばいいわけではなく、これは次の何かがあった時に、誰かがどう動けるだろうかをいつも考えている。もう終わらせるための準備を始める時期に来ている。

だから、わかる。悩んだそのことも全部、本当に充実したいろいろなものが自分の過去の引き出しになって、それをなんとかやりくりしながらやれる状況が来て、これからはそのやりくりしたものを出して、誰かに返していかなくてはいけない、そういう、必ず終わる時期が来るんだろうなと思ってやっている。だから苦しんでも悩んでもなんでもいから、何かやっていると変わっていく。大事なことは「今、仕事を続けている」ということ。

流れに身をまかせ、仕事の中に面白さを見つける

自分が追う方に行くことが必ずよいともいえない。流されるところに、流れ着いたところが実は本当に思うところだったりする。自分は当時、がんの代替療法に興味があったのだけれど、そういうことを学べる学部や大学院がなかった。そこで英語を学んで留学しようと思っていたけれど、如何せんシフトの調整が難しかった。現場で起こってくる問題に対処しているうちに、日々が終わっていった。行かなくてはと思っていたながら、目の前にあることにエネルギーが奪われていくのはとてもストレスだった。でも気がついたら「今、していることもそれは

それで面白いことなのかも」と思っていた。楽しさや面白さは自分で見つけるもの。面白い仕事だからやるのではなく、やっている仕事の中にある楽しさを自分で見つけられればいいだけの話。

前に人から言われ、自分でもやってきて思うけれど、仕事していく上で絶対に大事なことは、一緒に仕事をする相手。一緒に仕事をしていたいと思うような価値観や人間性をもつ人がいるところで仕事をすることが大切。それは同職者に限らず、医師も同じ。その人が他の人から好かれようが嫌われようが「患者さんに対してやることだけは絶対まっとうだ」と感じられる人とは一緒にやれる。1人でもいい。いるといないとでは全然違う。

エキスパートナーズの後輩へのバトンタッチ

藤枝先生の思いや教えは、改めて正しかったと思う。エキスパートナーズ制度が今まで続いているという事実は、続けられるという証でもある。看護が好きだということやずっと基本に持ち続けて頑張りたい。自分がしたいことを追い求めることも大事だけれど、社会の変化、社会から求められていることに合わせる能力を身につけること、柔軟に対応していくことも大事。今を一生懸命頑張りたい。とにかく今、目の前にあることに一生懸命悩んで迷って、考えて続けていけば、何か開けてくる。若い時の一生懸命さは、将来の引き出しの中の相当な宝物になる。お金では買えない本当に貴重なもの。私たちがバトンタッチしたものを、また次の世代にバトンタッチしてほしい。

インタビューにご協力いただいた皆様、貴重なお話を誠にありがとうございました。お話を通じて、今、私たち現役のエキスパートナーズが活動できるのも、時代に先駆けてスペシャリティを追い求めてこられたバイオニアの先輩方のご活躍があったことなのだと、改めて知ることができました。看護に向き合い、今をしっかりとやり抜くことがこれからのバトンタッチにもつながるのだという責任と使命感をもってまいります。次号からは、その後の10年、20年経った現在、バトンを受け継いできたエキスパートナーズ、そして活用する側の管理者の方々からのインタビューをお届けします。お楽しみに。

引用・参考文献

- 1) 藤枝知子：特集専門看護婦育成の動向 東京女子医科大学病院におけるエキスパートナーズ制度, Quality Nursing, 1 (3), 40-45, 1995.  
写真出典：「SPECIAL Median」

## 学園祭を終えて

東京女子医科大学看護学部（河田町キャンパス） 実行委員長 岡野 李咲

昨年度開催されました、学園祭は無事、成功を取めることが出来ました。これもひとえに諸先生方及び、関係者の皆様方のご協力とご支援あってのことと、心より感謝申し上げます。ひとりひとりが、学園祭に向け準備をし、一致団結したことは、限られた学生生活の中の思い出の一コマとして刻まれたことと思います。

看護学部学園祭実行委員長を務めさせていただき、関わる全ての方々と協力して、作り上げていくことに、やりがいと喜びを感じました。先輩、後輩の垣根を越えて協力し合い、ひとつの目標に向かって進んでいくことは、お互いの交流を深め、信頼関係をより強いものにしてくれたと思います。また、医学部生徒との関わりも生まれ、同じ志のもと勉学に励み、将来、医療の現場で共に働いていく仲間との交流をも深めることができました。

この学園祭を通して、たくさんの新たな繋がりを生み出せたと思います。

学園祭委員長を務めさせていただいた経験を糧に、今後の学生生活をより充実させ、将来に繋げていきたいと思っております。ご支援ありがとうございました。



東京女子医科大学看護学部（大東キャンパス） 実行委員長 小林 千恵

2015年10月19日に、大東キャンパスにて17回目となるキャンパス祭が行われました。昨年度の大東キャンパス祭のテーマは「KAKEGAWA - 輪 -」でした。“地域の方々と協力して創り上げるものだからこそ、人との繋がりを大事にしたい” “準備を進めていく中で新たな人脈を構築し、それを輪のように広げていきたい” そんな願いを込め、このテーマに決まりました。

当日は天候に恵まれ保護者の方や地域の方など大勢の方が参加していただき大盛況となりました。学生だけでなく、地域の方からも「楽しかった。」という声をいただくことができました。また、当日初めてお会いした役員ではない地域の方からもたくさん声をかけていただき、テーマに込めた“人脈を輪のように広げていきたい”という願いが叶ったように思いました。

さて、学生たちが一気にはじけたのが後夜祭です。皆で楽しく食事をし、ダンス発表やバンド演奏で大いに盛り上がりました。

最後に、キャンパス祭を通して地域の方々の優しさや暖かさに改めて気づかされました。沢山のお力添えをしてくださった地域の方々には感謝の気持ちでいっぱいです。これから先も素敵な大東キャンパス祭が開催され続けることをお祈り申し上げます。



東京女子医科大学看護専門学校 学校祭実行委員 遠藤果那・遠藤美波

学生自治会主催の第42回(N祭)が平成26年11月1日(金)・2日(土)の2日間にわたり開催されました。今回は学生同士、先生方、地域の方々また来校して下さった方々との結びつきを大切にしたい学校祭にしたい。また看護師を目指す仲間と共にチームワークを大切に、団結してよい学校祭を創り上げたいと思い「結~yui~」と言うテーマを掲げ協力し合い準備をしてきました。

1日目は一般公開へ向けた準備や講師の方にお越しいただき、接遇についてのお話をさせていただきました。看護師を目指す私たちにとって、とてもためになりました。

2日目は一般公開をしました。喫茶店は手作りの豚汁やワッフル、フルーツポンチなどを提供し、来校して下さった方々の憩いの場として利用させていただきました。

リラクゼーションコーナーでは、来校して下さった方々に、学校で学んだ手浴・足浴を香りの付きソープで実施しました。香りを楽しみながらの会話はお互いに良い影響をもたらしました。出し物ではコンテストを実施し学生だけでなく、先生方にも参加していただき楽しい交流の場となりました。またバザーでは東京女子医科大学東医療センターの病院長先生をはじめ職員の方々、学生にも協力をいただき素敵なバザー会場をつくることができ、盛況でした。

今回の学校祭を通して、他学年の学生同士や先生方も協力して創り上げることで団結力が生まれました。また地域の方々や来校して下さった方々との交流を深める良い機会となり、「人と人との結びつき」の大切さを実感する二日間となりました。

最後になりましたが、開催するにあたりご支援くださいました看護系同窓会の皆様はこの場をお借りして心よりお礼申し上げます。



## 看護学部音楽部の活動

看護学部 音楽部部长 3年 小池留莉子

私たち音楽部は、春休み・夏休み・クリスマスに入院する患者様やそのご家族を対象とした病院コンサートに加え、入学式や卒業式、医学部白衣授与式、オープンキャンパスなど様々な大学行事にも参加し、音楽活動を行っています。また、東京女子医科大学看護学会をはじめとする、学会での発表の機会もいただいています。部員は2年生と3年生合わせて22人で渡邊由美子講師の合唱指導のもと、練習しています。今年度は入学式、医学部白衣授与式、オープンキャンパス、看護学部同窓会、女子医大病院の病棟にて行われた七夕会で活動しました。夏休みには国立障害者リハビリテーションセンター、東京都リハビリテーション病院、七沢リハビリテーション病院脳血管センター、神奈川県リハビリテーション病院でサマーコンサートを行いました。病院コンサートは看護実習とはまた違った立場で、患者様と関わる機会をいただき、学生が患者様と手をつないで一緒に歌うなど貴重な経験をさせて頂いています。今後も部員一同練習に励み、病院コンサートでは患者様やそのご家族を少しでも音楽を通して癒すことが出来るよう頑張ります。



### 東京女子医科大学看護系同窓会 研究助成金 応募要領・選考方法・申請方法について

1. 研究助成の趣旨  
本助成金は、東京女子医科大学看護系同窓会員が、臨床の場で行う研究を助成し、臨床で働く看護師の研究への意欲を向上させることを目的とする。
2. 募集条件
  - 1) 研究の主たるメンバーが、東京女子医科大学看護系同窓会員であること
  - 2) 臨床で勤務している者（施設は問わない）
  - 3) 研究の成果は、助成を受けた次年度の東京女子医科大学看護学会学術集会での発表または、東京女子医科大学看護学会誌に投稿すること
  - 4) 看護研究成果は助成後2年以内に総会で報告を行い、要約して（1,200字程度）会報で報告すること
  - 5) 大学院生、研究職は除く（ただし、臨床看護職者との共同研究においては可）
3. 助成金額：  
1件につき、5万を限度とし、6件まで。
4. 申請書の内容：  
研究課題、研究目的、研究方法、倫理的配慮、研究計画（進行予定表）  
助成金の用途（できるだけ詳細に記入のこと。会議費、学会参加費、交通費は除く）
5. 選考方法  
同窓会理事会において慎重に考慮の上決定し、連絡する。  
応募した申請書書類は返却しない。
6. 応募締め切り  
第7回 平成28年6月末日
7. 申請方法  
必要事項を記載の上メールで申し込むこと。

### 東京女子医科大学看護系同窓会 学生ボランティア活動助成金 応募要領・助成金選考方法・申請について

1. 学生ボランティア活動支援の趣旨  
東京女子医科大学看護系同窓会では、学生のボランティア活動を応援するために補助金を交付する。
2. 応募資格
  - 1) 東京女子医科大学看護学部（河田町・大東キャンパス）、看護専門学校の学生で行っている部活動、サークルであること
  - 2) 医療施設・老健施設でのボランティア活動であること
3. 条件  
1年間の活動を会報で報告すること（5月末迄に学生支援係担当へ報告書を提出）
4. 助成金額  
活動内容により同窓会理事会で検討する。
5. 選考方法  
同窓会理事会において慎重に考慮の上決定し、連絡する。  
応募した申請書書類は返却しない。
6. 応募締め切り  
第7回 平成28年6月末日
7. 申請方法  
必要事項を記載の上メールで申し込むこと。

# 東京女子医科大学看護系同窓会会則

## 第1章 総則

(名称)

第1条 本会は、東京女子医科大学看護系同窓会と称する。

(目的)

第2条 本会は、会員相互の啓発と親睦を図り、看護専門職者として看護の発展と社会に貢献すると共に、東京女子医科大学の看護の発展に寄与することを目的とする。

(事業)

第3条 本会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- 1) 会員相互の啓発及び親睦
- 2) 会報の発行
- 3) 学校法人東京女子医科大学看護系への支援
- 4) 前各号に準ずる活動

(事務局)

第4条 本会は、事務局を東京新宿区河田町8番1東京女子医科大学看護学部内に置く。

## 第2章 会則

(会員)

第5条 本会は、次の会員を持って組織する。

- 1) 正会員 次の東京女子医科大学看護系の卒業生  
付属産婆看護婦養成所、東京女子厚生専門学校、  
付属看護学院、付属准看護学院、付属看護専門学校（旧付属高等看護学校）、看護短期大学・専攻科、  
付属第二看護専門学校（旧付属第二高等看護学校）、看護専門学校、看護学部、大学院の卒業生
  - 2) 学生会員 看護学部、看護専門学校、大学院に在学中の者
  - 3) 賛助会員 東京女子医科大学の現職員、認定看護師教育センター生で同窓会趣旨に賛同し理事会が承認した者
  - 4) 特別会員 大学の理事、学長、看護学部長、看護専門学校長、至誠会会長、施設長等で同窓会の趣旨に賛同し理事会が入会を承認した者
2. 会員は改姓、住所変更が生じた際には、速やかに本会に届け出なければならない。
3. 会員が本会の名誉を毀損し、または本会の目的、主旨に反する行為をとった場合には、総会の議を経てこれを除名することがある。

## 第3章 役員および顧問

(役員)

第6条 本会には、次の役員を置く。

- 1) 会長 1名
- 2) 副会長 若干名
- 3) 監事 2名
- 4) 理事 若干名
- 5) 代議員 若干名
- 6) 相談役 若干名

(役員の選出)

第7条 会長、副会長、監事、理事および代議員は、総会において承認を得る。

(役員の任務)

第8条 役員の任務は、次に示す通りである。

- 1) 会長は、会務を総括し、本会を代表する。
- 2) 副会長は、会長の職務を補佐し、会長に事故のある時は、会長の職務を代行する。
- 3) 理事は、理事会を組織し、その決議により本会の活動を運営する。
- 4) 理事は、本会の会務や会計を監視・監査する。会務や会計に不祥事が生じた場合は、これを総会にて報告する。
- 5) 監事は、理事・代議員などと兼ねてはならない。

(役員の任期)

第9条 役員の任期は、次の通りとする。

- 1) 一期3ヶ年とし、再任を妨げないようにする。ただし継続して再任は2期までとするが、代議員はこの限りではない。
- 2) 役員は、任期終了後も後任者が決定するまで、その任務を行う。
- 3) 欠員の補充によって就任する役員の任期は、前任者の残任期間とする。

(役員の解任)

第10条 会長は、次の場合において役員を解任することができる。

- 1) 会員の2/3以上の解任請求が生じる場合
- 2) 任務に耐えられない状況やその他やむおえない事情が生じ、理事会がそれを認めた場合。
- 3) 代議員が代議員会に2年間出席していない場合

(顧問)

第11条 本会に顧問を若干名おくことができる。

2. 顧問は、理事会の承認を受け、会長がこれを依頼する。
3. 顧問の任期は3ヶ年とする。

#### 第4章 会議および総会

- 第12条 総会は、事業の執行状態、役員の選出・承認、その他本会運営における決議事項を議決する。
- 第13条 総会は、通常総会および臨時総会とする。
2. 総会は年1回開催するものとし、理事会の議を経て会長が招集する。
  3. 臨時総会は、理事会が必要と認めるとき、監事から会務や改訂に不正を発見したとき、会員の1/5以上から総会の開催を求めた場合、会長は速やかに招集しなければならない。
  4. 総会は状況に応じて紙面総会として置き換えることができる。
- 第14条 総会の運営は、次の通りである。
- 1) 議長は総会にて選出する。
  - 2) 総会は、正会員および学生会員の出席人員より成立する。
  - 3) 議事は出席者の過半数により決定する。可否同数の時は、議長の決するところによるものとする。
- 第15条 会議は、理事会と代議員会とし、会長がこれを招集する。
- 第16条 代議員会は、総会に提出する議案、役員の選出、その他必要な事項を行う。
- 第17条 代議員会は、必要に応じて開催する。重要事項決議は、役員の2/3以上の出席者（委任状を含む）により決議する。

#### 第5章 会費および会計

(会費)

第18条 会員は、会費を納入することとする。会費および納入法は別に定める。

(会計)

- 第19条 本会の運営は、入会金、会費、寄付金およびその他の収入をもって充てる。
- 第20条 本会の会計は、年度末に所定の会計監査を行い、総会にて報告する。
- 第21条 本会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

#### 第6章 附則

本規約は2001年10月20日より施行する。  
この規約の施行に伴い既存の各同窓会規約は、2001年10月20日をもって廃止する。  
2002年4月27日改定 2005年6月11日改定 2011年9月16日改定 2012年6月9日改定 2015年6月13日改定

#### 東京女子医科大学看護系同窓会内規

- 第1条 東京女子医科大学看護系同窓会（以下（本会）という）の会計は、本会会則第4章に基づきこの内規により取り扱う。
- 第2条 本会の入会金および会費は次の通りとする。集金は一括納入も可能である。
- 入会金 10,000円（看護専門学校・看護学部・大学院入学時に徴収）  
会費（終身） 20,000円（看護専門学校・看護学部・大学院卒業時に徴収）
- 第3条 理事（会計担当）は、毎年その年度の予算を作成し、理事会の議を経て総会の承認を得なければならない。
2. 毎年4月1日以降総会において予算の承認を受けるまでの間は、前年度の予算の範囲内で仮執行することができる。
  3. 会計処理は、予算に基づき理事（会計担当）が会長の承認を得て執行する。
- 第4条 理事（会計担当）は、毎年度の決算を行い、監事の監査を受け、理事会の議を経て総会の承認を得なければならない。
- 第5条 役員が会議・行事などに出席した場合、交通費を含む会務手当を支給する。
- 第6条 正会員、学生会員、賛助会員、特別会員の死亡に際しては、理事（庶務担当）が会長に報告し、弔電を打電する。また故人に供花等に東京女子医大看護系同窓会の名称を使いたい希望があれば、本会事務局に報告のうえ名称のみ使用を許可する。
- 第7条 認定看護師教育センター生は、終身会費として入会時に20,000円を納入する。特典として同窓会への参加、研究助成金の授与、会報や図書館貸出証の発行がある。ただし、総会の議決権はなく理事・評議員には就けない。

付 則

この内規は、2001年10月20日から施行する。2002年4月27日改定 2005年6月11日改定 2011年9月16日改定

#### 第5期 東京女子医科大学看護系同窓会役員

顧問	理事長	吉岡俊正先生	会長	大熊あとよ		
	学長	吉岡俊正先生	副会長	野口真由美	篠聡子	
特別会員	至誠会会長	岩本絹子先生		小川久貴子	怒田弘美	
	看護学部長	佐藤紀子先生		山内典子		
	看護専門学校長	高木耕一郎先生	監事	古藤小枝子	飯塚晶子	
理事	赤川和子	青木雅子	代議員	秋山紀江	大井香奈美	
	原沢のぞみ	田原昌子		濱田亜希子	船越とし子	
	原美弥子	土谷朋子		味木由佳	樋川恵美子	
	坂内みゆき	梅林雪江		山本るり子	馬木小夜子	
	則松安紀子	小泉雅子		竹内道子	日暮久美子	
	矢代恭子	林佐多子		渡邊世津子		

\*\*\*\* お知らせ \*\*\*\*

**第16回 東京女子医科大学看護系同窓会 開催予定**

日 時：平成28年(2016年)6月11日(土)13:00~

場 所：東京女子医科大学看護学部内 ※詳細につきましては、後日お知らせいたします。

★お知らせや会報などを円滑にお届けできるように、姓名・住所・所属・連絡先などに変更が生じた場合、出身校(A~F)会員番号を書き添え、速やかに同窓会事務局までお葉書またはファックスにてご連絡ください。ホームページより所定の用紙をダウンロードできます。

本同窓会のホームページをご覧ください。http://www.dosokai.ne.jp/kangokeidousoukai/

会報が届かないという方が周囲にいらっしゃいましたら、上記(★)についてお声かけをお願いします。

**第12回 東京女子医科大学看護学会学術集会のご案内**

日 時：平成28年(2016年)10月1日(土)9:30~17:00 受付開始 9:00

場 所：東京女子医科大学 弥生記念講堂

大会長：東京女子医科大学病院看護部 川野 良子

HPアドレス：http://www.nrctwmu.jp/

物故会員

三浦(金子)園江様 甲野 昌子様 高木 をり子様 横山 佳代子様 吉澤 良様 下平 英子様 篠原 ヨイ様 岡野(柴田)万里子様  
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

**東京女子医科大学看護系同窓会スクールジュエリー&グッズ**

**東京女子医科大学看護系同窓会スクールジュエリー**

ミキモトが東京女子医科大学看護系同窓会のためにおつくりしたスクールジュエリーをご紹介します。英文の校名のイニシャルであるTWMUを美しくあしらったクロスのペンダントをはじめ、創立者の吉岡彌生先生のお好きだったカトレアの花をモチーフにしたピンブローチや、巴をイメージし、葉の一枚一枚をハート形にデザインした四つ葉のクローバーのブローチなどです。学生時代の記念に。また、母校の誇りとして。おつけただく方の美しさを引き立てるとともに、思い出のひとつひとつが胸元で囁きます。この機会に是非お求めいただき、いつまでも大切にご愛用ください。

価格改定の予定のため、詳細のお問い合わせ・申し込みは下記のスクールリング係へ

ミキモト本店：〒104-8145 東京都中央区銀座4-5-5

TEL 03-3535-4661

- A ペンダント  
パールサイズ 約5.00mm  
チェーン 約43cm (アジャスタ付)  
K18製、銀製
- B ブローチ  
パールサイズ 約5.50mm  
K18製、銀製
- C ピンブローチ  
パールサイズ 約4.50mm  
K18製、銀製



お買い求めは  
同窓会役員理事  
(P23参照)まで



バッグ500円/個 A4サイズ  
(タテ型2種、ヨコ型1種)



ファイル50円/枚  
透明・黄・赤・紫・緑



ライトペン100円/個  
黄・ピンク・黄緑・水色・紫

皆様からのお買い求めを心よりお待ちしております！

**編集後記**

同窓会の皆様におかれましては、日々ご活躍のことと存じます。さて、先日ですがこのところの「これまでに経験したことのない・・・」「異常・・・」という自然現象は「極端」が当てはまると耳にしました。いつもと変わらぬ日常はいつもと違う非日常となり得るそんな危うさを連想させます。しかし、同窓生が寄せてくださった原稿には「コツコツと一つずつ積み上げ、仲間を支えられ、プライスレスの宝物を先輩から後輩にパトタッチしていく」いままでに見たことのある風景があり、いつもとかわらない女子医を想い、ほっと安心できる瞬間をいただきました。また、今回より「東京女子医科大学病院のエキスパートナースの歩み」の新シリーズが始まりました。ご多忙の中、時間をとって執筆や取材に応じてくださった同窓生の方々にこの場をかりてお礼申し上げます。最後になりましたが、同窓生の皆様のご健康と益々のご発展を願っております。(M・H)

会報担当 原美弥子、山内典子、小泉雅子